

# うめく「生」

## アフリカ・赤道直下から

—5

夜明け。熱帯の鳥が奇声を上げて鳴いた。赤道に近いが、標高1700級のルワンダ・キガリの朝は冷気が漂う。

ムガベ・イベ君(14)が、18リットルのバケツで水を運んできた。水は、腕がしびれるほど重い。運び終えると、大急ぎで市場へ行く。大人相手に

### 生活のため、学校を断念……

たばこやバナナを売る。イベ君はこうして月に2000円を稼ぎ出す。父は3年前、内戦の犠牲になった。母は昨年4月、エイズで亡くなった。今、祖母ベナンシア・ナホさん(80)に引き取られ、内戦やマラリアで親を失ったいとこたち4人と一緒に暮らしている。

おばあちゃんと子どもたちだけの生活。だれかが働いて、この暮らしを支えなければならぬ。

年長のハプタリマナ・シエルウエ君(15)とイベ君のどちらかが、学校を断念せざるを得なくなつた。イベ君の方がその道を選んだ。イベ君はそれ

がつかなくて、何回も何回も朝まで泣いた。ルワンダは1994年4月の大統領機撃墜事件に端を発する多数派フツ族と少数派ツチ族による内戦で、100万人の虐殺があった。混乱したために、先生になった。

# 家の土壁が僕の教室



黑板代わりに壁にもたれ、勉強に励むイベ君(左)とジェルウエ君  
—ルワンダ・キガリで

をあきらめたイベ君のために、先生になった。「学校に行きたいか」。イベ君に尋ねてみた。ちょっと考えて、イベ君は「仕事も楽しいよ」

0円が必要だ。小さな土の家で、一家は暮らす。案内され、低い入り口をくぐった。目が暗さに慣れると、土壁一面に並ぶ白い数字が浮かび上がった。分数の計算式だ。その下のベッドに腰掛けて、イベ君はジェルウエ君からフランス語を習っている。壁の分数式もジェルウエ君が教えた跡だ。ここは2人の教室なのだ。ジェルウエ君は自分の代わりに学校へ送金したくか、直接ご持参下さい。

今年キャンペーンでは国連機関などへの寄付に加え、ウガンダの子どもたちをエイズから救うためのプロジェクトをサポートします。救援金は左記へ郵便振替か現金書留で送金いたたくか、直接ご持参下さい。

〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)

とほほ笑んだ。「おばあちゃんのために、勉強も仕事も力いっぱいやらなくちゃ」ジェルウエ君はイベ君がいくら忙しくても、この「授業」だけは続けるつもりだ。

文 小倉 孝保  
写真 玉置 勝巳